

(3) 発達理論

世界中で様々な発達心理学者やそれに類する人たちが、たくさんの発達理論を構築してきたし、今もまた次々と新しい理論が発表されている。ここで取り上げるのは、保育の場でもよく耳にするものである。詳しい理論は心理学関係のテキストに譲るとして、簡単に紹介をしておくことにする。

① ピアジェ

ピアジェは自分の子どもをはじめ多くの子どもを観察して、認知（知的能力）の発達段階説を4つに区分して提唱した。

- I 感覚運動期（0～2歳）
- II 前操作的思考期（2～7, 8歳）
- III 具体的操作期（7, 8～11, 12歳）
- IV 形式的操作期（11, 12歳～）

ピアジェの言う「操作」とは論理的構造化をもった思考をさしている。したがって、保育の対象である6歳ぐらいまでの乳幼児は、まだそうした「操作」が十分にできない存在として捉えられている。

感覚運動期の子どもたちは直接的な動作によって外界とかがわり、さまざまな行動や思考を取り入れていくとともに、それによって新たな概念を獲得していくことも可能となっていく時期である。

ことばを使うことができるようになる前操作期の子どもたちは、例えば「リンゴ」という単語は、丸くて赤くて甘酸っぱくて独特の歯ごたえがある果物を指しているということ理解することができるようになっていく。このように実物を直接指し示しながらことばと結びつけるとともに、それらの単語によって、目の前にないものをイメージできるようになってくる。また葉っぱをお皿に見立てたり、長方形の積み木を電車に見立てたりする象徴的機能も確立され、年齢に応じたごっこ遊びができるようになってくる。しかし論理的思考は未熟な段階である。この時期に特徴的なものとして、太陽や花に目や鼻をつけ、あたかも人格があるかのように扱うアニミズムや、自分が見ているものと同じものを他人も見ていると疑わない自己中心性などがある。

② エリクソン

心理社会的発達に焦点を当て、8つの発達段階を提唱した人である。エリクソンは人生を「乳児期」「幼児前期」「幼児後期」「児童期」「青年期」「成人前期」「成人後期」「高齢期」の段階に分けた。そしてそれぞれの段階における心理的危機と重要な対人関係を示した。この心理的危機を発達課題とし、それぞれの段階においてはクリアする必要があるものとしている。

特に乳児期の信頼対不信と青年期の自我同一性対同一性拡散については、よく取り上げられることがある。乳児期の信頼対不信については、身近な信頼できる特定の人に対する信頼が、そののちの人格形成の基礎となる重要なものとして捉えられている。また青年期の自我同一性対同一性拡散については、成人として社会的な自立を果たすための人格形成において、欠かせないものとして示されている。

【表3-1】

段 階		心理的危機	重要な対人関係	特 徴
I 乳児期	0～1	信頼 対 不信	母親	だれか（親）を心から信頼できるという気持ちを持てるようになる
II 幼児前期	1～3	自律性 対 恥、疑い	両親	自分の意思で排せつや生活をコントロールできることを学ぶ
III 幼児後期	3～6	自主性 対 罪悪感	基本的家族	自分で考えて自分で行動することを覚える。大人は子どものやろうとする気持ちを大切に育てる
IV 児童期	6～12	勤勉性 対 劣等感	近隣、学校	やればできるという体験をし、勤勉に努力することを覚える
V 青年期	12～20歳代 半ば頃	自我同一性 対 同一性拡散	仲間集団、リーダーシップのモデル	自分はどのような性格なのか、将来どのような生き方をしたいかを模索しながらアイデンティティを確立していく

VI 成人前期	20代後半～ 30代半ば頃	親密性対孤 独	友情、性、競争、 協力のあいて	特定の異性と親密な関係を持つ ことで相手を尊重し、大切に思 う気持ちを育む。結婚して家庭 を築く人が多い。
VII 成人後期	30代後半～ 60代半ば頃	世代性対停 滞	分業と共有の家 族	次の世代の人々（子ども、孫、 生徒など）のために知識・経験・ 愛情を継承していく
VIII 高齢期	60代後半以 降	自我の統合 対 絶望	人類	今までの人生を振り返り、自我 の統合を図る

(小野寺敦子 2009 改編)